

【論文】

19世紀のフランス文学と結核（前編）

寺 田 光 徳

La tuberculose dans la littérature du XIX^e siècle (I^{ère} partie)

Mitsunori TERADA

[Résumé]

La tuberculose est parfois mentionnée comme maladie incurable dans la littérature du XIX^e siècle. On sait bien qu'il y a eu au cours du siècle un grand événement qui fait époque dans l'histoire de médecine. C'est la découverte du bacille de Koch en 1882. N'a-t-elle pas exercé aucune influence sur la littérature? Susan Sontag a décrit comment la maladie fonctionne comme métaphore dans la littérature dans son excellent essai intitulé *Illness as metaphor* (1978). Est-ce que nous n'avons plus rien à ajouter à ses études? Nous prenons ici les romans français du XIX^e siècle qui sont inséparables de la tuberculose et essayons d'en analyser les fonctions narratologiques. Dans cette I^{ère} partie nous avons pour objet *La Peau de Chagrin* (1831) de Balzac, *La Dame aux camélias* (1848) d'Alexandre Dumas fils et *Les Scènes de la vie de bohème* (1848) d'Henry Murger.

キーワード：結核、『あら皮』（バルザック）、『椿姫』（デュマ・フィス）、『ボヘミアンの生活情景』（ミュルジェール）

はじめに 結核を作中に取り込んだ小説家として日本人読者にすぐ思い浮かぶのは堀辰雄だろうか。彼はまず『美しい村』（1934）の中で、軽井沢に点在する別荘や小川沿いの散歩道とそこで出会ううら若い女との交感の模様を想起を交えた時間の輻輳する意識に載せて描いて、プルーストの『失われた時を求めて』にあるコンブレの散歩道に関する描写を彷彿させているが、そこには「クレオゾールのぶんぶんする」「サナトリウムの赤い建物」が何度も現れては不安な影を投げかけている。

続いて堀は『風立ちぬ』（1938）で、自らの結核との闘病体験に基づいて、サナトリウムにおける療養生活の中にまで踏み込む。そこでは、婚約を交わしたカップルを主人公にして、一方の女性がサナトリウムにおける闘病生活の果てに亡くなり、その一年後二人が闘病生活をした軽井沢を他方の男性が再び訪れて、とある別荘で二人の体験を文章化しようとするところまでを描いている。作中で結核との闘病生活を生々しく想起させるのは、診断に利用されるレントゲン写真とそこに写った結核の病巣、サナトリウムの療養生活で重視されたベランダでの日光浴、それから結核患者の症状として典型的な空咳、微熱、血痰、咯血である。しかし、それらは比較的淡々と表現され、むしろ死を間近に控えた女性とそれに付きそう男性の穏やかだが悲愴感を漂わせた交情が小説の全体を覆っている。

サナトリウム文学あるいはもっと広く結核文学と名付けうる文学作品について日本やフランスに限

定しないで考えるとすれば、トーマス・マンの『魔の山』（1924）を最高傑作とすることにだれも異論はなかろう。この小説はドイツ人技師ハンス・カストルプ青年を主人公にして、スイスのダヴォス郊外にある国際サナトリウム「ベルクホーフ」におけるヨーロッパの人々のいわば隔離社会の人間模様を描いているのだが、時は第一次世界大戦を控えて人文主義者ゼテムブリーニと急進的カトリックのスコラ学者ナフタという二人のイデオログによって果てしなく繰り返される論争や、美貌のロシア婦人ショーシャと主人公で小説の視点人物であるカストルプとの「ヴァルブルグスの夜」の昂揚を軸に構成された二人の恋愛劇の顛末と、同時代の社会的現実の一断面が逆にサナトリウムという隔離社会故に魔術的に浮き彫りにされて、赤裸に展開されている。

『魔の山』は大作だけに結核に関する医療的関心の点からしても他の作品の追隨を許さない。そもそも高山地帯のサナトリウムというのが特効薬を持たない結核に対して大気療法をもっとも効果的に実現する目的で20世紀初めから欧米で競って建てられた医療施設であり、『魔の山』の舞台となったダヴォス周辺は高山の新鮮な空気を売り物にした「サナトリウム産業」のメッカとして知られていたのである。⁽¹⁾ 小説中には結核の症状や診断・治療の具体的な様子、そして当時の結核病理学の基本に関わる考え方が散在している。その中で我々の目を引くものを挙げると、まず治療法ではサナトリウム療法に付随する長時間に及ぶベランダでの日光浴、質量とも豊かな4回の食事（これにお茶の時間も加わる）、外科治療としては、胸郭内に人工的にガスを入れ肺とそこにある結核性空洞を縮小させ、治癒効果を高めようとする人工気胸術、肺切開やそれに伴う肋骨切除術があげられる。結核診断法では聴診や打診の他に、小説の終わりの方でカストルプの熱を結核ではなく「連鎖球菌」のせいだと明らかにする血液検査、それからレントゲン写真がある。レントゲン写真に対して作者のマンは特別に関心を持っていたらしく、ショーシャがサナトリウムを発つときその形見にガラス板に入った彼女のレントゲン写真をカストルプにもらい受けさせて、朦朧とした上体の輪郭や骨格、胸腔の諸器官を眺めさせたり、また彼が彼女に対する愛を告白する際には自分のレントゲン写真の結核痕をさしてショーシャに対する愛が彼女と出会う前からすでに始まっていたことの証だと述べさせたりしている。そのほかカストルプが叔父に自らの病状を述べる際に、結核形成、病巣の乾酪化、そして空洞化から肺の破壊にいたる過程について専門的な病理学的説明をするくだりや、院長のベーリングが説く血液中に結核菌が存在していても結核性疾患を引き起こさない健康な保菌者が存在するという近代的な病理学の主張は、現代の病理学と食い違うところはない。

ところで今言及した、結核の文学作品として有名な『風立ちぬ』や『魔の山』は、出版年からして明らかなように、症候、診断、治療を含む結核の病理学がおおよそ完成の域に近づいて、あとはストレプトマイシンという特効薬の開発を待つばかりになった頃の小説である。そこでこの時期までの結核の医療に関する歴史を瞥見しておいた方がよからう。

I 19世紀の結核

結核の医療史瞥見 結核の病原菌をコッホ菌（*bacille de Koch*）と発見者コッホ [1843-1910] の名を冠して言うことができるように、コッホの結核菌発見（1882）は画期的出来事であり、それに触れずして結核の歴史を語ることは許されない。その当時結核は、病死原因の中では4分の1を占めると言われ、人類にとっては最大の災厄であった。その病因が突き止められたのであるから、結核に関する病

因論を皮切りに、結核の病理学や、ことに患者に対する診断・治療に飛躍的な進歩が遂げられるという期待が一挙に高まった。

その後1895年のレントゲン [1845-1923] によるX線の発見、1907年のピルケ [1874-1929] による結核診断法としてのツベルクリン反応の開発があり、まず結核診断の分野に著しい進歩があった。いま予防法としてなじみ深いカルメット [1863-1933] とゲラン [1872-1961] の開発した弱毒結核菌ワクチンのBCG [Bacillus Calmette-Guérin] 接種が成功したのは1921年のことであった。このように診断と予防法が確立されたとしても結核そのものを退治することができなければ、いったん感染してしまった患者にとっては結核はいぜんとして不治の病であることに変わりはない。残るは結核菌本体に直接作用し結核を治療することのできる薬剤の開発である。それは1944年になってワクスマン [1888-1973] の抗生物質ストレプトマイシン開発によって実現を見る。こうして結核は近代の医学に多大の恩恵を蒙り、今では、先進諸国に限ってみると、死亡原因の第一位を占める病気ではなくなったのである。

このような結核の脅威の後退は統計的数字によればいっそう明らかである。

医学者で統計をよくしたブルーアルデル [1837-1906] によると、「19世紀の終わりには結核がすべての災厄の中でもっとも多くの死者を出していた。[……] フランスでは年間70万人の死者のうち15万人が死亡率の第一要因である結核に帰せられる。結核は腸チフスあるいはジフテリアの10倍近くもの死者を出している」。⁽²⁾ 比較のために歴史家ピエール・ギヨームが彼の著書で援用している「1万人あたりの肺結核による死亡者数」で見ると、1888-1897年ではおよそ36人だと算定される。しかしこの数字は当時すでに250万人余りの人口を擁するパリだけを取り上げると、大都市の不衛生な雑居状態が影響して57.7人に跳ね上がる。⁽³⁾ ギヨームはこれに続けて1906年から1961年までの「10万人あたりの肺結核による死亡者数」をグラフ化している。それによると「20世紀の最初の20年間は、おそらくスペイン風邪による1918年の災難をのぞくと横ばい」で、18人前後で推移する（1万人当りに換算。以下も同じ）。「続く1920年代から30年代は、第二次世界大戦で中断はあるもののほぼ一貫して減少し」、その数値は17人から11.5人程度まで低下する。第二次大戦中の1941年に戦争の影響で13人強の反発のピークを迎えた後、また急激に死亡率は減少を示し1950年には5人まで落ち込んでいる。⁽⁴⁾ これはワクスマンのストレプトマイシンの急速な普及を始めとして、結核制圧のための予防から診断・治療にいたる近代的な医療体制が国民的規模で公的に整備されたからだと考えられる。ギヨームの統計の最終年度に当たる1961年では、1.5人強で、55年間の最低値となり、フランスでも結核との格闘がめざましい成果が収められたことが統計的に証明されている。

ただしWHOの統計によれば、結核による死亡者数は発展途上国がその90%を占めるにしても、現在でも依然として人類の死亡原因の第一位を占めている。日本でも1990年から1999年の10年間の年平均死亡者数は4000人を超えており、しかもいくつかの集団感染の発覚や抗生物質に対する耐性菌の出現など、結核をめぐる状況には新たな要因が加わるとともに結核感染者数が微増傾向を示したため、結核問題の再認識が叫ばれているようである。⁽⁵⁾

初版『19世紀ラールス大辞典』の「肺癆」ところで、コッホの結核菌発見が結核の近代的医療史の出発点にあったことを確認することで、それがいかに画期的であったかを証明できるにしても、それとは反対に時間をさかのぼって結核の病理学がそれ以前にはどのように説かれていたのかを検討する

ことで、いっそうその出来事の重要性が示されるであろう。

当時の知識の様態を推し量るものとして貴重な『19世紀ラルース大辞典』を紐解いてみると、コッホの発見に触発された結核の医学的知識のめざましい転換が明白に表現されている。

現在では結核 (tuberculose) は、肺を中心とする結核菌による感染症で、結核結節 (tubercule) によって組織が壊死し、肺などの機能が破壊されてしまう疾患だとみなされている。ところが『ラルース大辞典』(1866-1879年発行) は「結核 tuberculose」について、「結核結節を生じる疾患ないし疾病素性」というのはなほだ簡単な定義を与えているだけである。その《tuberculose》に代わって、当時最大の脅威であった結核を詳述する役割を負わされていたのは《phthisie》である。この《phthisie》、正確に言うと《phthisie pulmonaire》を現代の結核と区別するために、以下では「肺癆」という古風な名称をあえて利用しようと思う。⁽⁶⁾

その「肺癆」の項は「極端な痩せ、緩慢で漸進的な組織消耗」という語源的定義を与えた後、病気としての肺癆について、「肺の結核性疾患 (affection tuberculeuse) で、多少とも緩慢な組織消耗を常に伴う」と定義している。その後には例によって「百科解説」が長々と付随する。だがその解説は結核菌が発見される以前のものなので、病因論を中心に現代的な「結核」のそれと様相を大いに異にしているのは言うまでもない。

ここでその解説をすこしのぞいてみると、問題の「病因」の欄では「遺伝は明らかに結核性疾患の原因の一つである。ただしそれがどのくらいの割合で遺伝感染しているのか証明することは容易でない。父母が結核で死去した子供についてはとりわけ用心しなければならない」と遺伝が病因の一つであることが強調される。さらに遺伝以外の病因を探って「一時期、接触感染 (contagion) によってこの病気が伝染すると信じられたが、一般的にこの説は今日では顧慮されていない」と断言しているが、その後患者を看病する近親者の感染例を見て、この時代にいろんな病気の元凶として名指された「瘴気 miasme」説がやはりここでも引っ張り出され、上述の断言が打ち消される結果となっている——なるほどこの項の筆者が認めるように、病人から発した瘴気で感染することも一種の接触感染にちがいない。そのほか病因には日当たりや風通しの悪い住環境、過剰な性行為や自慰行為、疲労が挙げられている。

「解剖病変」という病巣の病理解剖学的記述には、結核結節 (tubercule)、空洞 (caverne)、外殻 (coque) など現代の我々にもじみのある用語が見られて違和感はない。「症候」欄でも、咳、痰、寝汗、咯血、熱、胸の痛み、病的痩せ等、その後にもほぼ受け継がれていく内容であり、これらについては近代医学の観点からしてもすでに完成されていると見なせる。「診断」欄は「症候」欄の症状を繰り返すだけで、結局はこれらの外部に示された症候があれば肺癆という診断をくだすということを言っているに過ぎない。

病因論が確立されていない以上「治療」欄は当然不十分なものとどまる。「肺癆の進行を押しとどめる効果のある薬品は皆無である」と断言すると同時に、その当時よく処方された薬品として「鱈の肝油」、「温泉水」などが言及されている。間接的な療法としては滋養豊かな食事、寒冷地から温暖な土地への転地療養が勧められ、ローマ、ヴェネツィア、ピサなどイタリアの都市の名が挙がる。転地療養にはそうした都市の他、もちろん清浄な大気を呼吸できる田舎での生活、さらには温泉治療が推奨される。

『19世紀ラルース大辞典』補遺の「結核」 『19世紀ラルース大辞典』は2回にわたって補遺を追加出版する。1890年発行の「第2補遺」には「結核」が内容を一新して詳述される。そこでは医学界でこの結核の主題ほど短期間のうちに多くの研究、実験、論争をにぎわしくさせたものはないという書き出しで始まり、結核が当時もっとも蔓延している病気であり、またその犠牲者も多いことが強調される。それは、結核がたんに肺癆だけでなく、気管支炎、肋膜炎、髄膜炎、腹膜炎、腸炎、骨や関節の病変、冷膿瘍（abcès froids）などとしても発現する病気であること、そして「結核はコッホ菌という細菌（microbe）によって引き起こされる感染症で、伝染することが確認された」からだ、と理由が述べられる。つまり結核は、コッホの発見した結核菌を病原とすることが確認されたことで、もっとも症例の多い肺癆のみならずこれまで本来の気管支炎、肋膜炎などと混同されていた病気の一部までを結核の名称のもとに統一的に把握できる病気として立て直され、疾病単位として新たに確立され、その結果として実は当時多大の犠牲者をだす恐ろしい病気だとして認識されなおされるにいたったのである。ちなみに上述の引用にある「細菌」ということばが病原微生物の総称的名称として初めて使用されたのもラルース大辞典初版発行直後にあたる1879年のことであり、⁽⁷⁾ これもまたフランスのパスツール [1822-1895] やドイツのコッホに率いられた細菌学の当時の急速な発展とそれに影響された感染症病理学の一大転換を指し示す証拠である。

内容を一新した「結核」の百科解説では、最初に「バチルス」として一括した欄で、コッホの業績をたたえながら、結核菌の形態や菌の巢食う患部、培養に關しての説明がある。

続いて「病因」欄ではまず感染経路を取り上げて、結核菌が呼吸器、胃腸などの消化器、性器、皮膚を経る場合、それから特に集団感染の場合の住環境について述べる。次にこの結核菌を保菌していても結核にかからない場合、つまり健康な保菌者の例もあるので、結核に対する「疾病素質」について触れられる。「遺伝結核」（hérédotuberculose）という語が見出しに用いられて、これについてはおおむね否定されるが、まれに母親の胎盤を媒介として発生することがあると述べる。ただしこの症例は、現代的な定義では遺伝病というより先天性結核症に該当する。それに対して「疾病素質」のほうは遺伝するとみなされ、そのことによって結核にかかりやすいものとそうでないものの相違を説明する合理的な理由に利用される。

「予防」では痰壺の利用が進められ、結核患者の母乳や結核汚染された牛肉の摂取に注意が喚起されている。上述したいわゆる遺伝性の結核を避けるため、進行中の結核患者との結婚は断念するべきで、特に患者同士の結婚は厳に戒められている。ただしすでに回復した結核患者なら何ら問題はないとされる。

「予後」については、結核は治癒すると明言されている。

「診断」は後の治療の有効性にかかわるので、早期発見に努めること、結核菌の有無は顕微鏡かモルモットに対する移植で確かめ、病巣に結核菌が発見された場合は患部を摘出するよう説かれている。

「治療」については、病巣の外科治療が第一に記される。続いて肺結核の場合には気道を経由した結核菌に直接作用するとみなされた殺菌治療が近年もてはやされていること、使用される殺菌剤としてタール、クレオソート、フェノールを利用し、それらを気化させたり、霧状にして吸入させることが語られる。結核菌も細菌の一種なのでこのような一般の化学消毒剤が効果を発揮するのではないかとみなされたからである。しかしそれらの薬剤で結核が治ったという話はほとんど聞かれず、そのためそれらに比して最良の殺菌剤は何と言っても清浄な空気であり、そのため換気が重要であること、特

に高山の空気が推奨されることになる。これが後の高山サナトリウムにおける結核療養法を隆盛へと導く考え方である。

＊

以上のように『19世紀ラールス大辞典』における結核の記述の変遷を見ただけでも、コッホの結核菌発見が結核の歴史に画期となった理由をうかがい知ることができる。したがって冒頭で見てきた堀やマンによる作中での結核の言及も、近代的な結核の病理学がほぼ確立されてからのことであり、当然のことながらそれ以前のいわゆる結核文学とは趣を異にしているという予測が成り立つであろう。そこでコッホの結核菌発見以前の文学作品において結核はどう描写されたのか、これから我々の本題に取りかかろうと思う。

Ⅱ 肺癆とメタファー：バルザックの『あら皮』

『あら皮』の肺癆 19世紀フランスの何人かの小説家が作品の中で結核を取り上げている。その中の一人バルザック [1799-1850] は、人生に絶望した青年ラファエルを主人公にして、彼が骨董屋でふと見つけた「あら皮」が彼の欲望をかなえるかわりに寿命を縮ませ、その縮んだ寿命を表すようにあら皮そのものも縮んでいく『あら皮』(1831) という不思議な小説を書いている。

小説は一方でラファエルの金持ちになりたいという欲望をかなえさせる。そこには夢みたいなことだが、あり得なくはないと感じられる程度の合理性が存在している。最初は偶然のたまもので、人生に絶望して自殺を考え始めた青年ラファエルのなけなしの金を友人のラスティニャックが代わりに賭博に投じて大金を持ち帰る。次いで今度はあら皮の魔力のせいにされているにしても、伯父の莫大な財産が転がり込んでくる。この程度の話なら起こり得ないこともないと小説の読者は納得するだろう。他方、その代償とされた彼の命はひとえにあら皮の不思議な魔力によって縮んでしまうというのは何とも荒唐無稽な話だ。そこであら皮の不思議な魔力を解き明かそうと当代一流の動物学、力学、化学の専門家があらゆる方面から分析を試みるが、いずれも歯が立たない。バルザックはあら皮に象徴される未解明の神秘的な威力とそれを前にした近代科学の無力を対比させたのだ、というのはよく見られる解釈である。だが神秘的と言えは聞こえはいいものの、我々現代人はいうに及ばず、当時のかなりの読者もまたそこに、非合理のみならず不合理でもあるような現象を見いだしたのではないかと思われる。しかしそう言うものの、読者は実際に小説中のラファエルの早すぎる死ならばあまり違和感なしに受け入れることができたし、現代でも受け入れることができるのではないだろうか。それはラファエルの死が表向きあら皮のせいにされながら、その陰に隠れてあまり目立たないけれども、彼を確実に死に赴かせる不治の病が進行しているから、言い換えれば物語には主人公の死出の旅がその実、合理的なものであることを読者に納得させる仕組みが働いているからである。

その仕組みである説話論的装置として機能しているのが当時不治の病であった肺癆なのである。

最初、この死病がラファエルの人生につきまとっていることはさりげなくほのめかされている。友人ラスティニャックが賭博で稼いだ金のおかげでラファエルは放蕩の限りを尽くしたのだが、その後には無力感にさいなまれ、そんな時に「老兵ならば肺癆にむしばまれ、外交官ならば動脈瘤のせいで死が糸一本によって心臓にぶらさがらる。ほくの場合はおそらく肺病 (pulmonie) に『さあ、出かけよう！』と言われる」と教訓話のようにして述べられる。⁽⁸⁾ ここには肺癆と並んで「肺病」という

語が用いられているが、『19世紀ラルース大辞典』にも明確に記されているように、この時代の典型的な肺病は肺癆なので、同義語とみなせる。

ところでそれはラファエルがあら皮を入手する以前のことで、不思議なあら皮の方は読者の眼を引きつけておくカムフラージュの類で、彼の寿命を左右するのは実のところ肺癆ではないかという疑いを抱かせるに十分である。『あら皮』の中で肺癆のもつ意義を評価するには、ラファエルがいつ死病を罹患したのかという点は重要な点である。しかし上述の引用の肺癆は未来に起こりうる可能性の問題にすぎないと片づけられるかもしれない。

ラファエルが死病に言及する次の場面は、霊験あらたかなあら皮のせいで伯父の莫大な遺産が突然転がり込んできたので、そのあら皮の縮み具合を確認して欲望の代償に自らの寿命を縮めたことを見定めた直後のことである。

世界はいまや彼のものであり、彼は何でもできたが、もはや何も欲しなかった。砂漠の旅人のように、彼には渴きをいやすための水がわずかしがなく、どれだけ飲むかによって残りの命を測らなければならなかった。何かを欲すれば、それで命を何日縮めることになるのか、ラファエルは見きわめようとしていた。彼はあら皮の作用を信じはじめていたから、自分の呼吸に耳をすまし、自分が病気になっているように感じた。そして「僕は肺病じゃないだろうか？母は胸の病で死んだのではないだろうか？」と思うのだった。（『あら皮』 p.209 [p.248]）

もっぱらあら皮のせいで寿命が縮まるなら、ここで唐突に出てきて死の影をちらつかせている肺病は不必要ではなかろうか。このようなわれわれの疑問を別の方向に向かわせるように、ラファエルはこの病気について母親から受け継いだ病気ではないかとわざわざ付け加えて語っている。こうしたことを考慮して、上述の引用を無理なく解釈しようとすれば、ラファエルは母親から受け継いだ慢性病の肺病を、このところの乱れた生活からとみに悪化させてしまった、この上は死病をこれ以上悪化させないためにおとなしくしていよう、とならないか。だとすれば、あら皮は読者の目をくらますデコイのようなものと考えられようか。

やがてラファエルは欲望の象徴で蕩尽の対象であったフェドラの幻惑から醒めると、相思相愛の恋人となった可憐なポーリーヌと結婚することになった。そんなとき二人の幸福な未来に不吉な影をもたらすのはあら皮であり、ラファエルはいまや自分たちの不幸の元凶となったあら皮の秘密を解くために三人の科学者に分析をたのむ。だがすでに述べたようにそれはむなしい結果に終わった。

そのあら皮に関する無益な奔走と入れ替わるように、他方でラファエルはやはり彼の命をむしろ死病についても当代の三人の名医に相談している。最初のプリセは、脳や胃などの内臓器官の炎症によって彼の生命は危ぶまれる状態に陥っていると語り、病名については偏執狂という診断を下す。二番目のカメリスチュスは生命の原理が何らかの衝撃で損なわれた、という生氣論に則った抽象論を展開する。三番目に発言するモーグルディは折衷論者で、病気に関する理論はともかく、「腸の炎症とノイローゼが見られるという点では、われわれは同意しているのだから、それを鎮めるため病人に蛭を当て、湯治に行かせましょう。そうすれば、ふたつの体系的理論にしたがうことになりますから。それに肺病なら、どのみち助かる見込みはほとんどないのだし……」（『あら皮』 p.262 [p.338]）と主張する。

この場面は『あら皮』の中では評者によく注目される個所で、代表的なものとしてはバルザックの疾病論を論じたル・ヤウアンクとカバネスがそれぞれ当時の医学の理論的背景に基づいて、彼ら三人の医者主張に関して詳細な論証を展開している。⁽⁹⁾ 特にカバネスはモデルとなった現実の医師をはっきりと名指して、ブリセは炎症論で有名なブルセー [1772-1838] を、カメリスチュスは王政復古期に活躍した王党派の医師で、生氣論的な考え方をするレカミエ [1774-1852] を、モーグルディは理論的にはバルザックに「ある種のふざけた折衷理論」の代表と見られているが、体系医学を排して実験、観察を重視した実証医学の草分け的存在として今では医学史上で評価され、クロード・ベルナールの師としても知られているマジヤンディ [1783-1855] を代弁していると見なす。⁽¹⁰⁾ だが彼ら三人はいずれにしてもラファエルの病気について肺病だという明確な診断をしているわけではない。

それでは上述の引用中で「肺病なら、どのみち助かる見込みはほとんどないのだし……」というおぼつかない診断と死ぬしかないという悲観的な予後をもーグルディに言わせたのはどのような事情か。それは、ラファエルの友人で「数日前から治療をほどこして」いる新米医者ピアンションが、三人の高名な老大家のそばに控えていて、「肺癆 (phtisie pulmonaire) だと思われる」という診断を、ときには執拗なほど先生たちに対して繰り返し説明していた (『あら皮』 p.257 [p.329]) からである。

ピアンションは『あら皮』から晩年の『従兄ボンス』(1847)まで、「人間喜劇」の他の作品にも再三登場してくる医者で、作者のバルザック自身が彼においていた絶大な信頼は一貫して揺らぐことはなかった。特に『ゴリオ爺さん』(1834)、『ラ・ラブイユーズ』(1842)、『従妹ベット』(1847)に登場してきた際の彼の病気の診断は的確であった。的確であるというのは当時の医学のレベルに応じた、現実的な対応をしているという意味もあるが、それよりも重要なのは彼が合理性を備えている、つまり後の説話の展開に矛盾しない診断を与えているということである。つまりピアンションはバルザックの小説中で重要な説話的役割を負った人物としてたびたび登場してきて、ある意味では作者の説話的な意図を体現しようとしていると言える。『あら皮』についてもこうした状況は変わらない。現実のモデルを背後に想定できる高名な三人の医者たちは自らの信奉する当時の体系的な理論に則ってラファエルの病状に対して三者三様の診断を下して互いに自説を譲ろうとしない。バルザックは当時の肺癆の病理学的混乱を十分承知しており、多少の差はあるにしてもそのどれにも与することはない。ところでピアンションは紛れもない虚構上の人物であり作者の自由な創意を託せる点、モデルを背負うが故に拘束を受けざるをえない三人の名医とは立場が異なる。そのピアンションが三人の名医の混迷ぶりを尻目に肺癆説を主張して医師としての慧眼ぶり発揮する結果となった。このようなピアンションの扱い方と見ると、バルザックはすでにこの時点で彼の将来の輝かしい地位——『従兄ボンス』参照——を約束させるような才能を彼に付与していたと推論することも可能である。⁽¹¹⁾ しかしラファエルが肺癆であることを疑うのはピアンションだけでなく、ラファエル本人がそうであったし、また彼のそばにあって病状を熟知していたポーリーヌもそれを確信していた。

「[……] ねえ、ラファエル！ 寝ているとき、あなたの呼吸は自然じゃないわ。あなたの胸の中で何か響くものがあるって、あたし怖かったの。眠っているあいだも、あなたすこし空咳してるし、それが肺癆で死にかかっているあたしの父の咳によく似てるの。あなたの肺から出る音にはこの病に特有の奇妙な兆候がいくつか見られるのよ。それに、あなたはきっと熱があったわ。手が湿っていて、燃えるように熱かったもの。[……]」(『あら皮』 p.255 [p.327])

素人の目だが愛する者を見るポーリーヌの目は、呼吸音、咳、熱、寝汗と臨床医も顔負けするほどの確にラファエルの症状を捉えて、それが肺癆であることを言い当てているし、そうであることを具体的に読者に告げている。結局、三人の名医たちだけが彼らの体系的な理論によって逆に目をくらまされているのであり、それに対してビアンションはラファエルやポーリーヌの側に立って、彼らの素人判断を今度は専門家の立場から保証する役割を果たしていると言えるだろう。

ラファエルの肺癆をめぐる医者たちのあいだの紛糾は、炎症を鎮める効果があるとされた蛭治療と気力を高めるための湯治療法を採用することで4人の医師たちの意見が一致を見ることによって終結している。蛭は瀉血と同じですべての病気を炎症に由来するとみなすブルセー＝ブリセにとっては万能の治療法のひとつであった。ブルセーの炎症論は歴史の上ではコレラの流行（1832）に無力であったためにその後急速に支持を失うが、それとともに蛭による治療も効果を疑問視されるようになってくる。それに対してレカミエ＝カメリスチュスの湯治療法は、最初体力増強という一般的な説明から、その後は硫黄泉はカタル性の疾患にも有効だと効果が具体的に説かれるようになって、有効な治療法としての評判がいっそう高まる——19世紀後半のモーパッサン『モントリオール』（1887）はその最盛期の頃の湯治場の模様を描写している。二人の対立意見の持ち主から提案されたこれら二つの治療法については、折衷論者であるモーグルディはもとよりそれに異論はなく、また肺癆であることを主張したビアンションにしても、特別に効果的な治療法があるわけではないので彼らに同調する。

このラファエルの病気に関する議論の場面を終えると、物語は不治の病である肺癆の病理をたどるように進行していく。

ラファエルはその後医師たちの提案した治療法を受け入れて、サヴォワのエクス＝レ＝バンの温泉に逗留するだろう。しかしエクスでは他の湯治客からつまはじきにあい、彼はそこを発つことを余儀なくされる。つまはじきにされたのは他の客たちと親しくしようとしなかったことが原因だとラファエル自身は思っているのだが、実は「あの人の病気はうつるのよ」、「あれほどの病気なら、湯治に来るもんじゃない」という湯治客のラファエルに対する反発が存在し、それには治療法上の根拠のある理由が存在する、という背景が控えている。

当時の治療法に関して言及するとなれば、バルザックの時代に定評のあった『医科学辞典』（*Dictionnaire des sciences médicales*, 60 vols）を紐解くには無かる。上述したバルザックの研究家ル・ヤウ＝アंकによれば、何せこの辞典は医術に関心を持っていたバルザックの父親が予約購読をした代物でもあり、バルザック自身がそれを直接参考にした見た可能性もあるから。⁽¹²⁾ この辞典は全60巻に及ぶ医学専門辞典の名にふさわしく、「肺癆 *phthisie pulmonaire*」の項目にも病気の定義から始めて治療法にいたるまで総計約170ページを費やしている。そこで治療法として筆頭に掲げられているのはやはり昔から試されていた瀉血である。しかしそれが肺癆に特別効果があるからというわけではなく、すでに述べたように肺癆もまた一種の炎症による疾患だとみなされていたため、他の治療法に比べて瀉血が比較的效果があると信じられたからである。高山の大気療法については湿気の多い地域で感染した患者に効果をもたらすとされる転地療法の一環としてあげられているが、病気の初期でないとむしろこの療法は病状を昂進させる結果しかもたらさないと記される——高山の低気圧が呼吸器にいっそう負担を与えるために、肺の機能が損なわれている重症患者には悪影響を及ぼすというのがその理由である。

結局ラファエルの肺癆はすでに初期段階を過ぎていて、逆に高山のせいで病状が昂進され、その結

果としてまわりの療養患者に対してもせっかく治りかけている病気をかえってぶり返させ、重篤化させる恐れさえあるから、彼らから反発を食らったというのが真相であろう。その後のラファエルの衰えが急であることが彼の病状の重さを裏書きしている。

サヴォワのエキスを追われたラファエルが次に訪れるのは、エキスと並んで湯治で有名なオーヴェルニュ地方のモン＝ドールである。なぜ彼がこのように温泉療法にこだわるのかというと、おそらく大気に多く含まれた酸素や硫黄分などの吸入および入浴治療（『医科学事典』では、全身浴より半身浴や部分浴が推薦されている）が肺癆にも効果があると言われていたからであろう。

だが最初から他の湯治客に毛嫌いされたので、彼は人里離れた山中の一軒家で「無為の生活」を、「植物のような穏やかな生活」を送ろうと決意する。それは呼吸する空気こそ異なるが、以前ある医者の話にあった「10年間ひとことも口をきかず、味をきわめて薄くした食餌療法を守りながら、牛小屋のこもった空気のなかで1分間に6回しか呼吸しないで、」「肺病を治してしまった」（『あら皮』p. 217 [p.262]）スイス人の療法に似ている。彼はスイス人と異なって刺激の少ない澄んだ空気を吸ってできるだけ肺に負担を掛けたくないような生活を心懸けようとしているように見える——吸い込む空気も呼吸の仕方も肺の負担を軽減するという点ではむしろラファエルの方がスイス人より一貫性があるようだが、「牛小屋」の濃密な空気を吸うことも肺癆の立派な治療法として当時は認められており、『医科学事典』にも堂々と記されている。

しかしながらこうした治療のための奔走もむなしく、ラファエルは瀕死の状態でパリに戻らざるをえなくなって、最後は欲望をむき出しにしてポーリーヌの乳房に嘯みついたまま死を迎えるだろう。臨終にあたって今生の最後の願いとばかり欲望に身を任せたのか、欲望に負けたために死を余儀なくされたのか、ともかくラファエルの寿命とそれを表示するあら皮も縮んでなくなる。あら皮よりも問題の肺癆について言うと、肺癆が欲望を昂進させるというのはこの病気にまつわる神話の一つとして知られているところではあり、また何よりもラファエルの死があら皮のせいと言うより不治の病としての肺癆の必然的な結果として我々読者にきわめて論理的な結末を提供していることは明らかであろう。

肺癆と隠喩　ところで肺癆に依存したラファエルの寿命とあら皮の関係は修辭的な観点からするとアナロジーの関係にあたり、あら皮はラファエルの寿命を示すアナログンである。もっと厳密にパースの記号論に照らして言うと、寿命の長さがあら皮の大きさに歴然と現れるので、あら皮は類似性に依拠したアイコンだと規定できる。読者がバルザックの『あら皮』に魅せられるのは、ひとつにはアイコンとしては卓抜なオリエントのあら皮が選ばれた点にあるかもしれない。だがこのような明々白々な、その点では単純なアナロジーの卓抜さだけが『あら皮』の魅力を語っているとはもちろん言いえない。端的に言うと、それよりはむしろこうした不思議なあら皮に操られて、言い換えればあら皮がアイコンでアナログンである以上、実態的には我々がすでに見てきたように肺癆に制約されて、ラファエルが悲劇の生涯を送らざるを得なかったこと、あるいはむしろ肺癆にもかかわらず残された命を短期間で燃やし尽くしたこと、⁽¹³⁾ そのような短命に終わったラファエルの生涯を読者に生彩に富んだ、印象的な文章によってバルザックが読者に提示できたところにある。

我々はここまで『あら皮』の肺癆を説話論的に見てきた。つまりこのラファエルの悲劇の物語を合理的に規制するものとして因果関係の観点から肺癆を検討してきた。しかし『あら皮』における肺癆

が説話に対して合理性やリアリズムを保証するだけにとどまるわけではないし、そうであったとすればむしろ文学作品の中に現れた肺癆のような病気に関する興味を半減させてしまうだろう。そこで『あら皮』のような文学作品における病気の意味を考えなおしてみると、ラファエルの寿命とあら皮のように因果関係におさまりきらない修辭的な関係、言い換えれば語源的な意味でメタファーの関係——メタファーは語源的に「転移」、「置き換え」を意味する——が大きくクローズ・アップされてくる。実は我々が『あら皮』の中の肺癆に注目したのも、肺癆という病気が単に因果関係を中心とする病理学的な合理性を物語に導き入れただけでなく、またそれと密接に絡みながら、それに巧みに乗じて文学の表現性を高め、生彩に富んだ印象的、説得的な文章を産みだすことに貢献しているからにはかならない。

このような観点から『あら皮』における肺癆をあらためて見たとき、印象的かつ少々衝撃的で、しかもバルザック後の文学史上でも重要な意味を持つと思われる場面は、ラファエルが最後に自らの欲望をむき出しにしてポーリースの胸に噛みついたまま死に果てる場面である。結核のような病気が原因で死ぬとき、常識からすれば人はこのように欲望を昂進させることはない。病理学的に見たとき、ということは合理性を意識してということだが、結核と欲望の昂進は因果関係であるよりもそれとは反対に相反の関係にあるようにみえる。つまりラファエルは肺癆のために死に瀕したからポーリースに対する欲望をむき出しにできたというのはまったく理屈に合わないと考えられるので、肺癆のために死に瀕したにもかかわらずラファエルのポーリースに対する情熱は激しく、死ぬまで彼の欲望が消滅することがなかったというあたりが穏当な考え方だろう。だがそれまで読者がたどってきたラファエルの「欲望と蕩尽の生涯」からすれば、後者の合理的で常識的なラファエルの臨終よりも、むしろ肺癆を患ったがゆえに欲望は昂進して彼の生涯にふさわしい欲望むき出しの最期を迎えたとする非常識な考え方のほうが、説話論上では論理的ではないかと感じさせられるようなところもある。そこで常識と説話の論理との間に何とか折り合いをつけようとするれば、両者は相容れない、矛盾の関係にあるのではなく、肺癆の病状が進んでも、欲望は費えることはない、ラファエルは死に臨んで最後に生命力を振り絞って欲望を爆発させたのだ、とみなすことができるだろうし、これがもっとも妥当な解釈かもしれない。いずれにしても肺癆と欲望との関係について決定的な解釈を逡巡させるような状況がここでは提示されているわけだが、そのような状況自体を考えると、バルザックのテキストはあくまでも合理的な肺癆の病理学に依拠しながらも、いわばそれと戯れて微妙なずれを享受しながら説話を展開していると言うことが可能だろう。そこであえて大雑把に図式化を試みてみると、われわれは一方で病理学的な合理性に依拠した解釈、他方ではそのような合理性には抵触するが説話的論理では考えられなくもない解釈、それから最後にそれら両者をなんとか両立させられる解釈と、とりあえず三つの解釈を入手できることになろう。バルザックの『あら皮』の場合、三番目の解釈がもっとも妥当だと見なしたのであるが、別の小説家の手にかかれ一番目の病理学的な合理性を遵守して説話を展開することができるし、もちろん病理学的には非常識だが説話上の合理性さえ整えば二番目の肺癆をゆえに欲望が昂進するような小説さえ書くことができるだろう。こうした説話によって文学のなかで展開を許されるような論理、それを我々はメタファーの論理と呼んでおきたい。

そこで、先にラファエルの寿命をそのアナログンとして指し示すあら皮についてパースの記号論では類似性に基づいたアイコンと見なせると指摘したが、『あら皮』も含めてそれ以降の肺癆にかかわる文学作品も念頭に置いて考えたときには、そのような記号論にはおさまりきらない、修辭学の広い射

程をもったメタファーの論理がやはり肺癆と欲望の間に働いていることに気づかされる。しかしあら皮の時と同じく、ともかく最初は、文学におけるメタファー中にどのような論理が機能しているかを明快に語ってくれる記号論の観点から考察をしてみると、『あら皮』では肺癆患者ラファエルが欲望をあからさまにするのだから主人公ラファエルを媒介にして、肺癆と欲望の関係は隣接の関係にあるので、肺癆は隣接関係に基づくアンディス（指標）だとみなせる。

パース流の記号論ではアイコンやアンディスに契約に基づくサンボル（象徴）も加わるが、いずれにしても19世紀にはこのような記号論の枠を越えて肺癆のメタファーが拡大していったことは先程述べた通りである。そのような病気に関わる広範なメタファーをS・ソントグが『隠喩としての病』というこよないエッセーのなかできわめて自在にしかも説得的な仕方でも展開したことは周知のことだろう。そのなかで著者は文学における結核の隠喩について縦横に語りながら、結核を含めて病気につわる隠喩自体が科学的論理とは言い難い、その点ではいわばメタファーの論理にしたがって変遷するのを指摘することを忘れない。ソントグは病気の隠喩に関する19世紀の変化を一般的に示した後で、特に問題の結核を取り上げてこう述べている。

過剰な感情が肯定されるにつれて、それを貶めるために恐ろしい病気になぞらえることはもうなくなる。その代わりに、病気の方が過剰な感情の媒体とみられるようになる。結核は熾烈な欲望を白日のもとにさらし、人が公開したくないと思うことでも、その人のためらいなどお構いなしに公開してしまう病気であるとされるようになる。[……] 病気はおそらく患者も気づかなかった欲望を開示する。病気は——そして患者は解読されるべきものとなる。そしていまや、隠された情熱こそ病気の元凶と考えられるにいたるのである。⁽¹⁴⁾

ソントグはいみじくも「病気は——そして患者は解読されるべきものとなる」と言っている。繰り返すが、それは決して病理学に基づいた因果関係だけに限定されるわけではなく、記号論的な関係（アイコン、アンディス、サンボルの関係）から広い意味でのメタファーの関係をも指し示す。因果関係という科学的な合理性に依拠した関係のみならず、結核を含む病気について他の記号論的、修辞学的関係をも読みとろうとするのが19世紀文学に顕著になった傾向というわけだ。すると病因論的な関係の仕方、つまり科学的に厳密な関係の仕方は、こうした病気のメタファーのなかでは簡単に乗り越えられてしまうだろう。バルザックの『あら皮』に即して言う、「肺癆を患ったがゆえに欲望は昂進する」という多少とも病理学的な因果関係の衣をまとい合理性の影をかりうじて感じさせる説話の論理すら、メタファーの世界では「欲望を昂進させたが故に肺癆にかかった」という逆の関係に転化することすらも容易に起こるであろう。

続いて検討するのはこうした肺癆のメタファーが『あら皮』以上に展開していった例である。

Ⅲ ロマン主義の肺癆神話：『椿姫』と『ボヘミアンの生活情景』

『椿姫』の肺癆 『あら皮』で若きラファエルに幸せな結婚生活を断念させ、悲劇の死を遂げさせたのと同じように、デュマ・フィス（1824-1895）の小説『椿姫』（1848）の主人公マルグリットもまた肺癆のために早すぎる死を迎えた。肺癆はうら若き青年だけでなく、妙齢の美しい女性も犠牲にして

しまう。人口に膾炙した佳人薄命という神話の元凶としてよく名指しされるのは結核だが、その神話形成にもっとも貢献した作品に数えられるのが『椿姫』である。

デュマ・フィスの最初の著作であった『椿姫』は、文学のジャンル中では当時もっとも大衆を動員できた演劇の台本に書き改められ、1852年に舞台で演じられるや、サラ・ベルナール（1844-1923）など後の人気女優が次々とマルグリットに扮して大当たりをしたこともあって、19世紀ではもっとも人気の高い演目の一つとなった。またこの時期の最大のオペラ作家ジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）がそれをオペラに改作し、『ラ・トラヴィアータ』と題して1853年に世に送り出して以来、もっとも人気の高い演目として今も上演され続けているのは周知のことであり、それに伴って佳人薄命と結核とが緊密な関係で結ばれて神話として流布していった経緯は今更繰り返す必要もないかもしれない。

小説『椿姫』には比較的はっきりと日付が記されていて、二人の恋物語は肺癆の療養から帰ってきていたマルグリットに1844年の4月頃アルマンがヴァリエテ座で再会するところから始まる。マルグリットは当時20歳だが、高等娼婦という職業柄老公爵が彼女のパトロンについているし、ほかにも男出入りが激しい。それでもアルマンの純情にほだされたマルグリットはやがて夏になると二人でパリ郊外のブージヴァルに移り住むと、パトロンの庇護もなげうつ決心までして冬になるまでの間二人だけの甘美な生活を送ることになる。ただしアルマンはまだ若干24歳で弁護士の資格を持っているにしても定職に就いているわけではなく、親の仕送りで生活している身分であった。その後も二人の生活が続けるためにはどこかから必要な費用を工面してこなければならない。一方のマルグリットは自分の家財を次々と手放していくがそれにも限度がある。他方でアルマンはなくなった母親が残してくれた遺産を父親には内緒でマルグリットに譲り渡そうとする。

そこでついに父親が田舎から上京してきて、娼婦のマルグリットに母親の遺産すらつぎ込んでしまうほどのぼせ上がっている息子アルマンをいさめて、彼女と別れるよう説得を試みる。もちろんこうした物語の常で、アルマンの方はどんなことをしてでも自分の一途な恋心を守り通そうとするから、尊敬する父親の意見や忠告にもいっさい耳を貸さない。

父親は息子の説得が不可能だと見るや今度は相手のマルグリットの方から身を引かせるように一計を案じて、息子と彼女が相談できないような状況を作り出し、一人彼女だけを相手に別れることを承諾させようとする。アルマンの父親の説得の仕方は巧妙であった。まずマルグリットの息子アルマンに対する愛情を金銭づくでないと認めたうえで、きつとわけも分からず娼婦と一緒になったと悪評をたてる口さがない世間のせいで息子の出世の妨げになるから、息子をほんとうに愛しているなら彼の将来性を考えて別れて欲しい、また現在アルマンとは別に娘の結婚話も進んでいる、しかし娼婦と生活をするほどの兄の不品行ぶりを憤って彼女の婚約相手の家からは破談の申し入れすら受けている。愛する娘が幸福になるかどうかはマルグリットの決断にかかっているし、アルマンのことは別としても、果たしてマルグリットに何の罪もない娘の幸福までおちこわす権利があるのか、と半ば脅迫めいた説得をする。

そこまで言われるとマルグリットは自らを犠牲にせざるをえず、またアルマンの家族の敵となるよりも尊敬される友人となる道を選ぶのだと自らも納得して身を引く決心をする。別れた後のアルマンとマルグリットに関する後日談はあるが、二人の悲恋の物語にとってそれは文字通り後日談に過ぎない。最終的にマルグリットは1847年2月22日に肺癆で痩せ衰えたまま死去し、臨終の時にも傍らにア

ルマンの姿はなかった。

バルザックの『あら皮』とデュマ・フィスの『椿姫』における肺癆の利用のされ方を比較してみると、前者のラファエルは肺癆のせいでポーリースとの蜜月を断念して温泉地に療養に発たねばならず、また二人の変わらぬ愛を確認させる最終場面でもポーリースに対する激しい欲望の最後の発露を自らの死でもって中断させてしまう、要するに肺癆は恋愛の主題に直接介入してきて、それを妨げるように機能しているのだ。これに対して、アルマンとマルグリットの恋愛物語がラファエルとポーリースのそのように肺癆のせいで短期間に終わることを余儀なくされているにしても、その他の点では『椿姫』は『あら皮』とは異なる様相を見せていると言える。マルグリットのことばのなかに示されているように、肺癆という不治の病に冒されて先の命も残り少ないのだから愛情だけを頼みにアルマンと二人きりの田舎暮らしを思う存分楽しみたいと、むしろ恋愛の推進力となりえてもそれを阻止するようには機能していない、ただしその介入の度合いは軽度の干渉という程度に過ぎない。

すでに我々は「肺癆と隠喩」（前出 pp.90-92）のところで、『あら皮』の肺癆と欲望の関係には病理学的合理性でなしに説話の論理に依拠する合理性を見出せると述べてきた。『椿姫』における肺癆と恋愛の関係を同じ観点から検討してみると、肺癆と恋愛の主題は直接的な関係を構成することなくそれぞれ別の論理によって進行しているように見える。病理学的には肺癆と恋愛が因果関係のような関係性を持たないのは言うまでもないのだから、『椿姫』においては肺癆の扱いは説話の論理に影響を与えない病理学だけに関わる合理性のレベルに戻ったと言える。したがって一見すると『椿姫』の肺癆はきわめて「自然」なように見える。そのことはおそらく『あら皮』と『椿姫』の発想の次元に関わる相違に起因するであろう。

『椿姫』には作者のデュマ・フィスと実際に交際のあったマリー・デュプレシスというモデルがいたことが出版当初からよく知られている。彼の伝記を紐解くと、小説と同じようにデュマ・フィスは1844年にヴァリエテ座でそのモデルと出会い、彼女のために負債をこしらえ、そのため高名な作家であったあの父親デュマ・ペールに金の無心をする。その後1845年夏にデュマ・フィスとマリーは不仲になり、やがてマリーは音楽家リストの愛人におさまったという。1847年2月3日にマリーは肺癆によって若くしてこの世を去り、当時マルセイユにいたデュマ・フィスはその訃報に接したのは2月10日になってからであった。1848年になって彼は『マノン・レスコー』を読み直し、彼の体験に基づいて『椿姫』を書いた、ということである。⁽¹⁵⁾

小説の本文でもアルマンとマルグリットの関係については上述した実際の日時をほぼ踏襲しており、またマルグリットの死因となった肺癆と二人の恋愛の顛末についても大部分事実可依拠していると想像しても差し支えないだろう。とりわけ我々の関心事である肺癆と恋愛の関係は現実を引き写したせいか「自然」に見えるし、当時の病理学に照らしてみても異論を差し挟む余地はないようである。したがって、すくなくとも肺癆と恋愛の関係から見る限りでは、デュマ・フィスの『椿姫』はバルザックの『あら皮』よりもリアリズムに徹している、と言うよりもバルザックが肺癆に対して説話上の機能を担わせようと様々な工夫を凝らしたのに対し、デュマ・フィスの方はモデルのかかっていた病気をそのまま写實的に描いたと言った方がいいのかもしれない。

しかし、写實的に描かれていると思われる『椿姫』の肺癆が、すでに結核の病理学が確立されている現代の我々から見ると、いささか奇異に映る個所がある。それはもちろん時代の限界に起因するのだが、これからそれを考察の俎上に載せて、肺癆が『あら皮』とは別の側面でやはり小説の説話に影響

響を及ぼしていることを見ておこう。

小説『椿姫』の最初の方は作者の代弁者である語り手が高等娼婦マルグリットに関するうわさ話を主人公の紹介のためにまとめて語っており、その中でこんな肺癆の意味づけを行っている。

生来熱しやすいマルグリットがその頃病気だったことを言い落としてはならない。彼女は自分の病気の主な原因が一つにはどうやら過去の生活にあるような気がしていた。それで一種の迷信から、もし悔い改めて神の御教えに従ったなら、その代わりに神様が美と健康とをお授けになるだろうと思ったのである。⁽¹⁶⁾

ここではマルグリットの娼婦という職業が肺癆の病因に掲げられ、ただしそんな生活を悔い改め道徳的に正しい生活を送ればその病気からも癒されると、彼女が信じていたという語り手の指摘がある。後に主人公マルグリットが老いた公爵の庇護を脱してアルマンとの「純愛」に生きようとしたり、また庶民的な道徳感情に訴えて息子との仲を清算するようアルマンの父親から説得されたとき、自らの幸福を犠牲にしてそれに応じてみせたところにも、こうした彼女の迷信的思考方の反映を見ることができのかもしれない。だとすればこうしたマルグリットの信ずる非科学的な病因論も『椿姫』の説話の展開に間接的に一定程度の影響を与えていると見ることができるが、マルグリットの口から直接語られることばからすれば——「あたし、アルマンとは別れないわ。あの人と一緒に暮らすのに今さら逃げ隠れもしないわ。正気のさたじゃないと言われるかもしれないけど、あたしあの人に惚れてるのさ！［・・・］その上、あたしもそう長くは生きられないんだから、顔を見ただけでこっちまで年を取ってしまいそうなおじいさんのご機嫌をとって、不仕合わせに暮らすなんかまっぴらだわ。』『椿姫』pp.200-201[p.199]——、むしろ彼女は自らに残された命が残り少ないことをはっきりと自覚し、そのような迷信的思考方によって不治の病から癒えることができるなどはすこしも思っていないようなので、それは語り手の想像ともすこし違って主人公のマルグリットにとってはときおり頭をかすめる過去の反省の類にすぎないだろう。

それよりも上記の引用で注目しておきたいのは、冒頭の文にある語り手自身によるマルグリットの病気の解説の方である。そこでは、マルグリットの熱しやすい性格、情熱的な性格が病気と今にも結びつきそうな趨勢を示している。

先に『椿姫』はマリー・デュプレシスをモデルにして、悲劇的な結末を遂げた恋愛を主題にした小説であることを述べたが、その中で語り手は二人の恋愛に関して他方の当事者であるアルマンの証言を引き出す聞き役として明確な位置を占めていると同時に、この恋愛譚を作者の代弁者として読者に伝える報告者の役割も兼ねている。その時語り手は自らが報告する二人の恋愛譚を読者に対してできるだけ真実らしく、説得的に語るためにマルグリットの性格や行動に対して注釈を加える権利を当然有しているから、そこには我々の関心の的である肺癆に関わる論評が動員されるのもしごく当然のことだろう。

このような語り手の特に踏み込んだ肺癆に関する主張が見られるのは、一時的に病気から癒えて療養地からパリに帰ってきたマルグリットに、またかつての乱脈な情熱的性行が頭をもたげてきたと説明しているときである。

その上に、旅から帰ってきたマルグリットはこれまでにないほど美しくなっていた。年齢はちょうど二十歳である。それに、病気はなおりきったのではなく一時おさまっただけなので、胸の病にはつきもののあの激しい欲情を絶えず起こさせた。(同上、p.30 [p.18]。傍点は引用者)

語り手はここでもうはっきりと「胸の病にはつきもののあの激しい欲情」と語っている。残念ながら邦訳の吉村訳からは省かれているが、原文の「激しい欲情 *désirs fiévreux*」に付加された指示形容詞《ce》は「あの」や「例の」というテキスト外の情報を喚起させる指向的作用を担い、そのため同時代の読者にとって肺癆と欲望の密接な関係はすでに常識的なものであったことを証している。つまり、肺癆が欲望を昂進させるという神話がこの時代に成立していたことを、語り手がはっきりと言いつけているのである。先ほど引いたソントグの考え方からすれば、文学における病気のメタファーがすでに人口に膾炙しているという証明になるだろう。だがもっぱら文学だけに許される非科学的なメタファーではないかという我々の抱きがちな先入観に反して、先ほどの『医科学辞典』においてもこの神話は神話としてでなく科学的言説として堂々と提示され、当時ならではの科学的根拠に基づいて肺癆と欲望の昂進の因果関係が実際に合理的な装いをほどこされて説明されているのである。

その『医科学辞典』の記述によれば、肺癆患者が性的快楽に大変熱心であるのは説明しやすい。なぜなら——と言っても因果関係が逆転して説明されているが——生殖器官と呼吸器官は他の身体器官に比べて密接な関係にあり、とりわけ思春期の生殖器官における過大な熱がたとえば女性の生理として適切にコントロールされれば問題ないが、それがうまくいかないと呼吸器に悪影響を及ぼして炎症を起こすからである。⁽¹⁷⁾ どうやらこの記述は、そもそも欲望過多の人物は肺癆に罹りやすいのだから、肺癆患者が欲望を燃やすのは当然である、と主張したいようだ。

肺癆患者であるがゆえに激しい性的欲望を抱くのか、それとも逆に性的快楽の追求が激しいために肺癆に陥るのか、当時の肺癆に関する科学的言説ですら曖昧なままなのだが、とにかく肺癆と欲望の密接な関係が当然のこととして当時通用していたことだけは間違いない。結局現代人にとって突飛に見える肺癆と欲望の結びつきも、『椿姫』の語り手にとっては当時の常識に沿って考えた結果にすぎないのである。

『椿姫』と肺癆のメタファー　ところでそれよりも我々にもっとも奇妙に見えるのは、マルグリットの肺癆がアルマンと知り合う前からかなり進行していたことが知らされ、またアルマンが初めてマルグリットの私邸で彼女と食事のテーブルに着いた日でも、激しく咳き込んだあげく咯血して彼を驚かせ、それが日常的で病状が深刻であることを窺わせているにもかかわらず、周囲も肺癆を患う彼女本人も病気をあまり重大視する風もなく、ましてやアルマンはそのような肺癆を心配するどころかブーヅヴァルでマルグリットと思うさま愛欲に耽溺して熱烈な同棲生活を送り、肺癆に関して患者としてのマルグリットや感染を恐れるべき自らの立場もいっさい顧慮していない点である。ここに当時の肺癆の病理学と現代の結核の病理学との明白な相違が現出している。つまり結核菌という科学的な病因がまだ明らかにされていないため——すでに述べたようにコッホの結核菌発見は『椿姫』の出版から35年後の1882年の出来事である——、肺癆は細菌による感染症とみなされていなかったのである。

ただし結核の病理学が当時確立されていないとは言っても、もちろん時代に見合った形で肺癆の病理学は存在した。そこでテキストからそのあらましを拾い出してみれば、肺癆の病理学が『椿姫』の

説話をどのように、どの程度に支配しているかが明らかになろう。

まず肺癆の病因論については、細菌が病因だとされていないかわりに遺伝病説が唱えられている。

あたしはいずれはこの病気で死ぬのでしょう。何となく若いうちに死んでしまいそうな気がいつもしていたのですもの。あたしの母さんも胸の病で死にましたし、それにこれまでのような調子で暮らしていた日には、母が残してくれたたった一つの遺産といってもいいこの病気をなおのこといっそう悪くするばかりでございます。（同上、p.281 [p.284]）

それから予後については、今の引用を始めとしてこれまでも示してきたように、長生きはできないことが再三マルグリットの口から語られている。そしてそのような予後が想定されるからこそ、それに後押しされて彼女は残る命を惜まず思うさま自由に生きようと決断して、これまでの生活を捨ててブーヅヴァルでアルマンと二人きりで暮らす道を選択するのである。

肺癆と診断するための病気の症状については、現代の結核の際と変わらずに、咯血、微熱、咳の発作が記述されている。死期が近づくとそれにひどい発熱やうわごとが加わってくる。

言わずもがなのことであるが、時代のせいでは病因が明白でなかったことが治療法には大きな影響を与えていた。『あら皮』の時と同じで、やはり医者が頼ろうとする治療法は瀉血である（同上、pp. 49 et 304 [37 et 311]）。が、それは膏藥（p.297 [302]）と同じく対症療法にすぎない。それからまた湯治がある（pp.27 et 84 [15 et 75]）。マルグリットがアルマンに再会する前に肺癆を癒しに赴いた湯治場がバニエールであった。バニエールは正式な名をバニエール・ド・ビゴール（Bagnères de Bigorre）と言い、ピレネー山脈のオート＝ピレネー県にあってローマ時代の昔から知られていた温泉地である。『椿姫』の語り手はマルグリットとパトロンの公爵とのなれそめについて、湯治場として知られていたバニエールに肺癆もすでに重篤な「第三期」になっていた娘の療養のために外国の公爵が来ていて、そこで娘を亡くしてしまったので、彼女と瓜二つでまるで娘の再来かと思まごうマルグリットに愛情を注ぎ始めたとして小説中で解説を加えている（pp.27-28 [15-16]）。またフォリオ版『椿姫』の注釈によると、小説中でマルグリットが出会った「老公爵」というのは、彼女のモデルになったマリー・デュプレシスのパトロンの、彼女の葬儀にも列席したスタッケンベルク公爵だということである（p.358）。そのほかマルグリットはブーヅヴァルにアルマンと隠棲した際には牛乳を飲もうと言って——これは当時肺癆のための食餌療法として認められていた療法の一つである——、愛する男の前で自らの病んだ体にも配慮しようとする殊勝な一面をのぞかせる（p.156 [155]）。

以上のような『椿姫』に現れた肺癆の病理学に関するあらまは、我々が依拠してきた当時の医学的知識の集大成とも言える『医科学辞典』の記述と矛盾するところはない。したがって『椿姫』における肺癆の病理学に関わる叙述は時代のエピステーメに沿っており、その意味ではソントグの言う病気のメタファーとして『椿姫』から特に取り上げなければならない要素は見いだせない。現代の我々から見たとき病気のメタファーとして問題にするべきは『椿姫』の叙述よりむしろ当時の肺癆に関する医学言説のほうであろう。

観点をすこし変えてみよう。今我々の目の前に肺癆に関する『椿姫』のテキストと『医科学辞典』に代表される医学のテキストがある。『椿姫』自体は当時の医学言説と矛盾するところはないから、病気のメタファーに関して問題なのは医学テキストであると言った。我々も当時の医学が文学である

という主張を時々耳にすることがあるが、その時代に身を置いてみればいつの時代においても医学テキストは常に科学的真理を追究しようとした成果であり、説得的効果つまり修辭的效果を多少狙うことはあっても自らが科学的真理だと想定するものをさしおいて美学的効果を追求しようとする文学テキストまがいのものを目指すことなどありえないだろう。医学テキストが文学テキストであると説くのは我々にしか許されない考え方であり、つまりそれは歴史の到達点としての現代の高みから過去を振り返る回顧的視点に必然的に随伴してくる我々の傲慢で不遜な考え方であろう。

さて、『椿姫』のなかで我々の目からは奇異に思われ、ソントグからはメタファーの最たるものの一つとみなされてきたのは、先に指摘した肺癆と欲望の因果論的な関係であった。⁽¹⁸⁾ しかしこれはすでに我々が述べたように、同時代の医学が主張した見解でもあり、文学だけに許されたメタファーではなかった。当時の医学に現代人からメタファーだと断じられるような過誤が生じてくるのはもちろん結核菌という病因が明らかにされていないなどの当時の医学上の限界が原因であることは言うまでもないことだが、こうした科学的な過誤の問題には医学的ないし科学的言説なりのメカニズムが含まれているので、デュボスの『白い疫病』に頼ってすこし検討を加えておこう。デュボスは我々の目から見れば滑稽で誤った肺癆の治療法についてそのよって来たところを次のように指摘している。

論理的思考によるがゆえに合理的だとされる治療法を定式化しようとする誘惑はいつの時代にも強いのである。病気について詳細な科学的説明がうまくでき、その論理を厳密に医療上に適用できるような具体的知識が十分に揃った症例は不幸にしてまれであるのに、論理の誘惑は、しばしば証拠も不十分なのに結論を出し、患者にとっては害あって益のない治療法が考え出されたのである。⁽¹⁹⁾

引用で非難的になっているのは治療法だけであるが、それを我々の文脈では治療法に限らず肺癆の病理学全般に敷衍できる。換言すればここでは、ドゥルーズが『意味の論理学』で取り上げたような、言説の対事物に関する指示作用 (désignation) の次元で問題となる真偽と言説内の要素間に関する記号作用 (signification) の次元で問題となる合理・不合理の混同から惹起されてくる過誤が問題なのである。つまり全面的にそうだとは言えないにしろ、当時の肺癆の医学的言説は誤りを含んだ、後に否定されてしまうような「真理」に基づいて構築されているにもかかわらず、自らの言説の合理性を追求するあまり、治療法を始めとして滑稽な医学的知識を流布させるにいたったということである。先に取り上げた肺癆患者が性的快楽の追求に熱心であるという『医科学辞典』の憶説はさしずめこうした過誤の典型であろう。

肺癆と性的欲望の因果関係という問題はこのようにおおよそ当時の医学言説の問題として解消できる。だが『椿姫』をめぐるそれとは別に肺癆についてよく問題にされるのは「佳人薄命」というアフォリズムに代表されるロマン主義的な神話で、今度こそそれは医学的言説の問題ではなく、文学上の問題として検討しなければならない。

ロマン主義文学と肺癆の神話 「ロマン主義の人々は、新しい角度から死の品性を高めることに成功した。つまり、下卑た肉体を解体し、人格を霊化し、意識を広げる結核を利用した。結核をめぐる空想を通して死を美化することができたのである」(『隠喩としての病』、p.20 [p.28]) とは、ソントグの主張だ。議論を簡潔にするために、このソントグの主張を仮説として利用し、『椿姫』のテキスト

がそれに添うのかまず検証しておこう。語り手は若くして死んだマルグリットを惜しむと同時にその死に対しては次のように肯定的に評価もしている。

私はこれらの品〔死後に競売に付された家具調度など〕をつくづくながめわたした。どれもこれも女の賤業をしのばせるよすがである。そして私は人知れず神の慈悲を思った。なぜなら、神はこの女を普通の懲らしめの時まで生きながらえさせず、娼婦たちにとっては第一の死とも言うべきあの老齢に達せぬうちに、栄華と美しさのなかで死なせたもうたからである。（『椿姫』、p.18 [p.6]）

マルグリットの無類の美しさについては語り手やアルマンの証言、それから彼らのほかにも入れ替わり立ち替わり彼女に言い寄ってくる上流人士たちの数からしても今更言うには及ぶまい。肺癆はその美しさを保ちながら、その美しさがついでに死ぬことをマルグリットに許したと語り手は評価しているのである。愛にまつわる死病を取り上げた小説の中では、たとえば梅毒（バルザックの『従妹ベット』やユイスマンスの『逆しま』など）や天然痘（ラクロの『危険な関係』など）に比べて、肺癆は外に現れる病気の症状が目立たず、特に女たちについて言うならその美しさを損なうことがもっと少ない死病だろう。むしろ「白い疫病」と言われるくらい患者の外観の白さを際立たせる肺癆は、その症状の白さによって患者の美しさを表現するという逆転現象さえ起こるほどであった。マルグリットが死に臨んで自らの手で書いた手記ではさすがに容色の衰えを嘆く文章が見られるが、それでもアルマンに会えずに死別することの無念さに対して最愛の恋人に美しいままの姿を記憶にとどめさせることができると自ら納得しようとする彼女のけなげさからは、死によって美しさが救われるという考え方をはっきりと窺うことができる。

さらに『椿姫』の語り手はキリスト教的道徳の観点から、マルグリットをイエスに仕えたマグダラの娼婦マリアと比較して、彼女の死を次のように裁いてもいる。これは『椿姫』の特徴というよりは、むしろ逆に『椿姫』が他の凡百の作品と同じように伝統的なキリスト教的道徳観を共有していることを示すものである。

母でもなく、娘でもなく、さりとて人の妻でもない女、こういう女をさげすんではいけない。[……] 神は過去にただの一度も罪を犯したことの無い百人の正しい人々よりも、一人の罪人の悔い改めることのほうをいっそう喜ぶたもうがゆえに、われわれは神を喜ばせるようにしようではないか。そうすれば神は厚くわれわれに報いたもうであろう。地上の愛欲のために身を誤ったが、神を信じさえすれば救われそうな人々に遇ったときには、彼らを親切にゆるしてやるとしよう。（同上、p.40 [pp.26-27]）

マルグリットは死の床で売春という悪徳を悔い改め、キリスト教徒として終油の秘蹟を受けて死んでいく。キリスト教的な道徳観からすれば、彼女の死は悪徳の汚れをぬぐい去ってくれる重大な契機で、彼女のような女たちにとって死は救いの意味を持つ。ただし救いとしての死は肺癆による死に限らず、死一般に拡大することが可能である。

このようにマルグリットの夭逝には肺癆ゆえの、キリスト教的文化ゆえの意義が見いだされるのだが、それだけでは肺癆が「佳人薄命」神話にもっともふさわしい病気として特殊化されていくにはま

だ不十分かもしれない。そのためには歴史が語るように、何よりもこの作品がデュマ・フィス自身の小説や演劇を通じて人口に膾炙すること、それからその作品の人気に便乗するように、ヴェルディがすぐにオペラに仕立て上げることが必要不可欠であった。しかしそれでもなお同一主題の繰り返しという量的な問題だけに肺癆の神話化の原因を帰すことはできまい。デュマ・フィスの小説からヴェルディのオペラへと原作の改作される過程で肺癆神話の醸成に寄与するものが他になかったか、もうすこし検討を加えてみよう。

デュマ・フィスの小説とヴェルディのオペラの間で際立つ相違は作品構成である。小説の方は、語り手がアルマンから彼のマルグリットとの恋愛譚を聴取するという、いわゆる額縁小説の構成を採用している。それに対してオペラ『椿姫 *La Traviata*』ではアルマンとマルグリットがイタリア人のアルフレードとヴィオレッタに変わったうえに、3幕構成で第1幕が「パリのヴィオレッタの屋敷」でアルフレードとヴィオレッタの出会いを描き、第2幕第1場「パリ郊外の家」は二人の同棲生活とアルフレードの父親ジェルモンが息子とその恋人に別れるよう個々に説得を試みる場面で、第2場「フロラの屋敷」は小説とはすこし別の展開が用意されており、アルフレードはみんなの前でヴィオレッタを侮辱し、それに激怒した彼女のパトロンと決闘になる。第3幕「ヴィオレッタの寝室」はヴィオレッタ臨終の場面。小説のマルグリットが寂しい死を迎えたのに対して、オペラの方ではヴィオレッタのもとにジェルモンやアルフレードが駆けつけ、彼らのあいだの誤解がいっさい解けてからヴィオレッタに死が訪れ閉幕となる。⁽²⁰⁾

さて、小説がオペラへ改作されたとき肺癆神話を浸透させるために有利に働いたもの、言い換えれば先にソントグが指摘したようにロマン主義的な死の美化をいっそう強化するような方向で働いたものがなにかあるだろうか。

『椿姫』の本題は何をおいてもマルグリットとアルマンの二人の恋愛である。そこでオペラとして構成するのに余分だと考えられる小説の額縁部分、つまり語り手がマルグリットとアルマンの悲恋の物語に対して第三者として立ち会い、それを報告するために背景としての事情を述べた部分、それがすっかりあとかたもなくオペラの台本から切り捨てられている。ところで小説の語り手は二人の恋愛に顔を出すわけではないので、何らその展開に影響を及ぼすことはない。しかし近代小説の典型的な語り手のように中性的な報告者としてのみ二人の恋愛に関係しているのではない。とりわけ小説の始めの6章まではマルグリットとアルマンとも同列にある一人の登場人物として個人的にもマルグリットやアルマンを見知っていること、二人の恋愛譚をどのように知るにいたったかということを事細かに語っている。またさらに語り手は、これまでのテキストの引用からも判断できるように、主人公の二人の恋愛を読者に伝達するのに直接話法的でなく間接話法的に語って、自らの解説や注釈・評価を付け加えている。その部分がオペラではぱっきりと切り捨てられたのだ。こうして小説では語り手が自らの意見を付け加えてマルグリットとアルマンの悲恋を報告しそれについての読者の解釈を一定の方向に誘導していたのが、オペラにおいては二人の恋愛譚だけが観客の眼に直接提示され、彼らに自由な解釈が許されることになった。

オペラで切り捨てられてしまったが、デュマ・フィスの原作の語り手による際立った解釈とは何か。端的に言うとはそれはマルグリットの死にキリスト教道德による救いを見いだそうとした点である。しかも他方のオペラにおけるレチタティーヴォやアリアの内容の方は原作に逆らうように、ヴィオレッ

タの臨終に際して儀礼的に神の加護を頼む以外はまったくキリスト教的な解釈は削除されたし、臨終の場に司祭の姿も見あたらない。さらにオペラではこうしたキリスト教文化の削除にとどまらず、それに代わって顕著な特徴として前面に出てきたのは、ヴィオレッタがアルフレードのために果たす「犠牲」、ジェルモンは「誇りと名誉」の要請（第2幕1場）、アルフレードの関心は「恥辱」を拭い去ること（第2幕2場）、ジェルモンが最後にヴィオレッタを娘と認めて「犠牲」に対する代償を払うこと（第3幕）、といずれも市民道徳の論理である。

結局、ヴェルディのオペラにおける市民道徳の全面的な展開で最終的に救い出されて勝利を得ることになったのはヴィオレッタのアルフレードに対する「真実の恋」であろう。なぜなら、小説では一人寂しく未練を残しながらこの世を去っていくマルグリットに対して、ヴィオレッタは臨終の場に駆けつけたアルフレードからは彼ゆえの深い愛に恥辱も犠牲も起因したことを理解してもらい、ジェルモンからは娘と認めてもらうと同時に二人の仲を引き裂いたむごさに対して許しを請われた、つまり、ヴィオレッタは一方で自らには最終的に自らの払った犠牲が報われたことを死の直前に知って慰謝を与えられ、また他方でアルフレード、ジェルモンの父子や観客に対しては彼女の死が愛に殉じた死であることを、すなわち彼女の愛は死として永遠化されたことを明白に印象づけたからである。

では問題の肺癆は？「肺癆 *tisi*」というイタリア語はオペラでは医者ヴィオレッタの臨終の床で致命的原因として使用されるにすぎない。致命的な病気と言われるものの、それはむしろ漠然とほめかされるにとどまり、ある時はあの「乾杯の歌」で歌われる快楽追求の動機となったり、またアルフレードがヴィオレッタに接近する口実を提供し、それに呼応して彼の優しさに彼女が心を動かされる理由となったり、さらには終局のヴィオレッタの死因となって機能しているのだが、彼女の死そのものが愛に殉じた死と愛の昇華という意味合いを持つため、その不吉な牙をまったく抜かれてしまっていると言うほかない。つまりソントグの言うように、肺癆による死はとりわけヴェルディのオペラで決定的に美化されたと言ってよいだろう。

『ボヘミアンの生活情景』と肺癆 『椿姫』と同工異曲と言える恋物語を書いたのはフランス文学史に『ボヘミアンの生活情景』（1848、以下書名を『ボヘミアン』と略記）の作者としてからうじて名をとどめているアンリ・ミュルジュール [1822-1861]である。⁽²¹⁾ 彼の名が今でも語り継がれるのは、『椿姫』などと並んで世界中でもっとも人気のあるオペラのひとつで、無名の青年詩人口ドルフォとお針子ミミのあいだの青春の恋物語を描いた、プッチーニ [1858-1924]の『ラ・ボエーム』（1896）の盛名に負うところが大きいだろう。⁽²²⁾ ところでこの名作オペラの恋物語の大半は、ボヘミアンと呼ばれる無名の芸術家たちの生活情景を描いた原作の23ある断章中で、18番目に位置する「フランシーヌのマフ」という章を下敷きにしたものである。

彼女はジャックに出会い彼を愛した。二人の関係は半年続いた。彼女と彼は春に結ばれ秋に別れた。フランシーヌは胸を患い、そのことが分かっていたし、また恋人のジャックもそれを承知していた。一緒になって2週間してから、医者だった友人の一人が彼にそのことを教えてくれたからだ。枯葉とともにあの子は逝ってしまうよ、と。⁽²³⁾

同宿の隣人同士であった若い彫刻家ジャックとお針子フランシーヌのカップルが貧しい暮らしの中

で愛を懸命にはぐくみ、それでもわずか半年という短い期間の後悲しい別れを余儀なくされたのだが、それはフランシーヌの肺癆のせいであった。タイトルの「マフ」は二人の愛情の象徴で、病状が重篤になるにつれ部屋の寒さに耐えきれなくなったフランシーヌがジャックに買ってくるように依頼したものであり、彼が何とか金を工面して買ってきたそのマフを死の床でも彼女は決して手放そうとしなかった。

『椿姫』のマルグリットと境遇は異なるものの、フランシーヌもまたあらかじめ運命づけられた肺癆の死を前に、ジャックとの愛を味わい尽くそうと生き急ぐ。そうして『ボヘミアン』は『椿姫』とは別のロマン主義的傾向を見せて、肺癆神話の形成に寄与する。ここでもソントグの指摘を利用すると、「悲しみを感じとるには——とは、つまり、結核にかかるにはという意味でもあるが——「感受性の強い」人間であることを必要とする。結核の神話は古くよりある憂鬱症——四つの体液説によればこれも芸術家の病気であった——この憂鬱症の観念の長い歴史のほとんど最後を飾るものである。憂鬱症にかかるのはというか、結核にかかるのは、すぐれた性格の持ち主であった。感受性が鋭く、創造力に富む、独特の人物であった」（『隠喩としての病』、pp.32-33 [p.48]）。フランシーヌの場合、まことにロマンチックな感傷と形容すべきか、彼女のはかない命は木の葉に象徴されている。二人の出会いの頃木の葉は青々としている（p.281）。それが田舎に遠出した7月には黄色く色づき始め、この不幸な予兆にジャックは胸を痛める（p.282）。最後に彼女が死去する11月1日の万聖節の前日、中庭の一本の木から死の床に一枚の枯葉が枕元に舞い落ちた。窓を開けると、木には葉が一枚も残っていなかった（p.284）。

『椿姫』についてはオペラと小説の間に主人公の肺癆の死をめぐる解釈の異同があり、オペラでは市民道徳をてこにロマン主義的な死の美化の方向が強調されていた。ここでもオペラと小説の異同は顕著で、とりわけ原作の断章「フランシーヌのマフ」からは、彼女の死の後日談に当たる後半部分がまったく省かれてしまっている。プッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』もやはり甘いロマン主義的感傷の傾向を鮮明にしようとしたのかここでは問うことをしないが、ともかく小説にはロマン主義的な死の美化をいくぶんゴシック・ロマンス的な方向に推し進めた少々毒気のあるエピソードが存在する。それは恋人のジャックがフランシーヌのデスマスクを取ろうとするエピソードで、彼が才能豊かな彫刻家であることによってそれがいっそう迫力をまして描かれる。

「フランシーヌはジャックのために理想を具現した人間のイメージを残そうとして、死んですでに冷たくなっていたにもかかわらず、いまだに愛の喜ばしい輝きと青春の麗しさのことごとくを示す表情をまもっていた。彼女は美術作品の蘇りであった」（p.289）。ジャックがデスマスクを取ろうとして石膏を流すと、それにかすかな痙攣で応じるフランシーヌは死からよみがえってくるような錯覚を彼に与えた。ミュルジュール自身が言及するようにこれはピグマリオン神話を彷彿とさせる。ピグマリオンはこのうえない美しさをたたえた象牙の女像に恋し、アフロディーテの祝福を受けてその像ガラティアをよみがえらせると自らの妻とした。

ただしその後のジャックのゴシック的ロマンスは神話とは別の方向をへ向かい、リアリズム的な展開をみせる。ジャックは自らの悲しみを別の恋によって慰めようと試みるのだが、フランシーヌの魅惑から自らを解き放つことは不可能で、新しい恋人マリーにも自らの理想とするフランシーヌのイメージを押しつけようとする。当然この新しい恋は実らず、結局ジャックは最終的に失意のうちに、肺癆を疑わせる病気のせいで早世する。

オペラにはないこのような後半部でもまたフランシーヌの死は、オペラのみみの死と同じく、肺癆によって美化されており、先に見た『椿姫』のロマン主義の神話をそのまま踏襲しようとしている。そのことを意識して、原作『ボヘミアン』の語り手は、ジャックの手になるフランシーヌのデスマスクについて、「彼女は美に殉じて死んだようだった」（p.289）と明言しているのである。

【注】

- (1) 福田真人、『結核という文化』中公新書1615、2001、p.197.
- (2) Pierre Darmon, *L'Homme et les microbes*, Fayard, 1999, p.299 [ピエール・ダルモン『人と細菌』寺田光徳・田川光照訳、藤原書店、2005年、p.416] .訳文は上記邦訳を利用した。
- (3) Pierre Guillaume, *Du désespoir au salut : les tuberculeux aux 19^e et 20^e siècles*, Aubier, 1986, p.149.
- (4) *Ibid.*, pp.152-153.
- (5) 福田真人、前掲書、pp.12-14.
- (6) 訳語については肺結核の漢方名である「労瘵」を利用することもできるが、ここではルネ・デュボス、ジーン・デュボスの名著『白い疫病——結核と人間社会』（北鍊平訳、財団法人結核予防界、昭和57年 [Rene and Jean Dubos, *The White Plague. Tuberculosis, Man and Society*, Little Brown and Company, Boston, 1952]) の訳語を採用した。
- (7) Pierre Darmon, *Op. cit.*, p.168 [p.231].
- (8) Honoré de Balzac, *La Peau de Chagrin in La Comédie humaine*, t. X, coll. Pléiade, Gallimard, 1979, p.262 [邦訳『あら皮』小倉孝誠訳、藤原書店、2000年、p.232]. 以下本書からの引用については書名の後にページ数を付すにとどめる。訳文は文脈に不都合のない限り上記邦訳を利用した。
- (9) Moïse Le Yaouanc, *Nosographie de l'humanité balzacienne*, Maloine, 1959, pp.179-220. Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la Maladie dans les récits réalistes (1856-1893)*, Klincksieck, 1991, pp.95-156.
- (10) Jean-Louis Cabanès, *Ibid.*, pp.96-97.
- (11) Cf. Hiroshi Matsumura, 《Balzac et la médecine de synthèse : le point de vue médical dans *La Peau de chagrin*》, *Études de langue et littérature françaises*, n° 74, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, 1999, pp.36-40.
- (12) Moïse Le Yaouanc, *Op. cit.*, p.15.
- (13) 『あら皮』の訳者小倉孝誠は『作品解説』で「情熱と蕩尽の物語」と題してこの小説を紹介している。
- (14) Susan Sontag, *Illness as metaphor*, Penguin books, 1991 (1st publishing in 1978), p.46 [邦訳『隠喩としての病』富山太佳夫訳、みすず書房、1982年、p.68]. なお今後本書からの引用に際しては書名と引用ページを本文中に略記するにとどめる。訳文は（以下も含めて）上記邦訳を利用した。
- (15) 《Vie d'Alexandre Dumas Fils, 1824-1895》et 《Mademoiselle Marie Duplessis par Jules Janin》, in *La Dame aux Camélias*, coll. folio classique, Gallimard, 1975, pp.313-339.
- (16) Dumas fils, *La Dame aux camélias*, *Ibid.*, p.29 [邦訳『椿姫』吉村正一郎訳、岩波文庫、1971年改版、p.16]. 以下本書からの引用については書名の後にページ数を付すにとどめる。なお引用の訳文は（以下も含めて）おおむね上記邦訳を利用した。
- (17) 《Phthisie pulmonaire》in *Dictionnaire des sciences médicales*, t. 42, Panckoucke, 1812-1822, pp.59-61. 以下同書への指示は『医科学辞典』というタイトルとページ数を本文中に表記するにとどめる。
- (18) Susan Sontag, *Ibid.*, 「かつて結核とは情熱過多から来るもので、官能に惑溺する人々を悩ますもの

と考えられた」(p.22 [p.30]) など、諸処でこの種の指摘がある。

- (19) ルネ・デュボス、ジーン・デュボス、前掲書(注6)、p.157.
- (20) ジュゼッペ・ヴェルディ『椿姫』(DVD: ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場、1992年、音楽: ジュゼッペ・ヴェルディ、台本: フランチェスコ・マリア・ピアヴェ)、魅惑のオペラ第2巻、小学館、2007年。
- (21) Henry Murger, *Scènes de la vie de bohème*, coll. Folio, Gallimard, 1988.
- (22) ジャコモ・プッチーニ『ラ・ボエーム』(DVD: コヴェント・ガーデン王立歌劇場、1982年、音楽: ジャコモ・プッチーニ、台本: ジュゼッペ・ジャコーザ、ルイーダ・イッリカ)、魅惑のオペラ第15巻、小学館、2008年。
- (23) Henry Murger, *Op. cit.*, p. 281. 以下本書からの引用についてはページ数を付すにとどめる。

【本研究は平成19～21年度科学研究費補助金の支援による研究「三大社会病（結核、梅毒、アルコール中毒）と自然主義期の小説」の成果の一部である。】